

佳作

コロナと共に生きる

愛媛県 済美高等学校二年 岡本 楓夏

二〇一九年十二月初旬、中国の武漢市において、世界で第一例目の感染者が報告された。この頃、私は中学二年生で、中学から始めたバレーボールに日々打ち込んでいた。新型コロナウイルスのことは、日に日にニュースで報じられるようになったが、私にはまだ遠い国で起きた出来事のように思っていた。二〇二〇年に入ると、日本で第一例目の感染者が確認され、その後、ダイヤモンド・プリンセス号で、感染者が多数確認されるという事態に陥ってしまった。

私の所属していたバレーボール部は、私と同様に中学から始めた部員が多いながらも、新人戦では、あと一勝すれば県大会というところまで勝ち進んだ。私はライトのポジションを任せられ、チーム一丸となって松山市総体に向けて、日々の放課後練習と週末の練習試合をこなしていた。そんな中で毎日のように、ニュースでは日本各地で感染者が報じられるようになり、世間は目に見えないウイルスの脅威に震えていた。しかし、愛媛県にはま

だ感染者がいなかったため、私には他人事のように思えていた。

二〇二〇年三月、当時の首相が表明した休校要請により、学校は休校となった。それまで当たり前過ぎていた日常が一変した。部活動も停止され、これからどうなっていくのかと不安になっていった。同時期、愛媛県で第一例目のコロナ感染者が確認された。感染者に対して世間から非難の目が向けられていることをSNSで知った。なぜ感染者が責められないといけないのかという気持ちと、感染してしまう恐怖よりも、感染したときの世間の目が怖いという気持ちが入り乱れて複雑な思いを抱いていた。それでも、マスクと手洗い・うがいの感染予防を行いながら日常は過ぎていった。その後、未知のウイルスから、少しずつコロナウイルスの実態が明らかになり、社会活動も徐々に再開していった。私は中学三年生になり学校が少しずつ再開していった。日常が戻ってきたように思えたが、頻回の消毒や給食中の会話の制限など、以前とはかけ離れた日常になっていた。部活動も再開したが、休校期間での練習不足が響いて、チーム皆がなかなか力を発揮できずにいた。練習試合も行うことができず、チームとしての実力を試すこともできなかった。それでもなお、総体があると信じてチーム全員で練習を続けた。しかし、五月末に顧問の先生から総体が中止になったことを告げられた。少し前から中止になる

かもしれないという噂を耳にしていたが、それが現実になったことを聞いて、これまで二年間積み上げてきたものが一気に崩れたような感覚になった。チームの三年生の中には、ひどくショックを受けている子もいれば、もう終わってしまったのかと諦めの表情をしている子もいた。しばらくして、顧問の先生から総体の代替として、交流試合をすると告げられた。通常、六月中旬には引退を迎えているはずだったが、このとき既にその時期は過ぎていた。それに加え、交流試合は県総体などに繋がる試合ではないため、練習を続ける意味を見いだせない部分が目まぐるしく変化した。そんな時に、チームメイトの一人がやめたいと言いつつ出た。私は、その子の気持ちが分からなくもなかったが、皆で話し合い、三年生全員で引退するということにした。その時、私は最後まで皆とバレーボールを楽しもうと思った。交流試合は二回戦敗退という結果だったが、チーム全員で楽しんで、笑顔の絶えない試合となった。その三日後、先生方の計らいで、近隣の三校で引退試合を行うことになった。今まで何度も練習試合をしていた中学校だったため、お互い楽しく最後のバレーボールができたのではないかと思う。

二年たった今、振り返る機会を得て、当時の心境を思い出した。コロナウイルスがなければ変わらない日常があったかもしれない。だが、コロナ禍を経験したからこそ、学校に行くことや部活動ができることが当たり前で

はないということに気付かされた。また、バレーボールをただ頑張るだけでなく純粹に楽しみ、チームメイトとの絆が深まるきっかけにもなったと考えている。当時、心のどこかで最後の締めくくりとなる総体をしたかったという気持ちもあったが、交流試合や引退試合を企画してくださった先生方にとっても感謝し、試合で締めくくることができて、良かったと思っている。チームメイトとの絆や先生方の支えがあったことで、コロナ禍の中学校生活を乗り越えることができた。

未だにコロナウイルスは終息しておらず、Withコロナの時代に突入している。今後も感染対策のために、人との繋がりが疎遠になりがちだが、このような時代だからこそ、支え合う気持ちを大切にしたい。また、制約や制限は続くだろうが、コロナを理由に夢や目標を諦めたり、疎かにしたりするのではなく、前向きに努力し続けたいと思う。